

商学部

尾碕 眞



図書館は私にとって静寂で集中できる空間であり、図書や資料を借りることはもちろんのこと自習に適した場所であった。私が小学生の時利用した図書館は家から歩いて10分ほどの（今は無いが）栄図書館であった。この館はコンクリート造りの建物で外観も、学習室（閲覧室）も静かで落ち着きがあり安心感を醸し出していた。内部は天井が高く、夏は窓が開いていて、風が抜け涼しかった。静寂プラス涼しさにより夏休みは特に良く利用した。中学生になり自転車を利用できるようになると、自転車で7-8分の鶴舞図書館へ行くようになった。それは中学生でも大人が利用する閲覧室に入れたからである。栄図書館は、小中学生は同じ学習室であり、図書館の崇高なイメージに合わなかった。少しでも大人の仲間に入りたかった、その希望は鶴舞図書館によりかなえられたのである。大人たちは中学生がいても何も言わずただ書物に集中していた。栄図書館の児童・生徒学習室の数倍の面積がありながら、静寂であり、時々ページをめくる音と外を走る市電の音、中央本線の汽車の汽笛が聞こえてきた。歴史が好きなことから愛知県史、名古屋市史等を借り読んだ。

高校に入学してからは、鶴舞図書館にも通ったが、高校の図書室も利用した。自習するためではなく、岩波新書の新刊を借り、読むための挑戦を始めた。難解であったが、分からないことは職員室に行き先生に教えてもらい、何とか1冊を1週間で読み終えることが出来た。新しい月になると先生が声をかけてくれたし、司書の先生も新刊が入ったよと笑顔で伝えてくれた。高校2年、新書を読む速度は1冊5日、高3では3日となった。読む速度は早くなった、これは親切に教えていただける環境があったからだだろう。多くの新書の中でも、伊東光晴の『ケインズ』は今でも鮮明に記憶のなかに残っている。大学・大学院生時代も鶴舞図書館へ通い、統計資料室を大いに利用した。統計表は整理し、論文に利用したが、コピーは1枚30円（当時、牛乳1本（200cc）10円だった）と高価であったためコピーは出来ず、ノートに書き写した。現在の鶴舞図書館は私が大学院を修了してしばらくしてから、建て替えられ、きれいになった。一度入館したが、昔の閲覧室、資料室の内部とはあまりにもかけ離れ落ち着かなかった。

大学教員になり大学の図書館を利用するが、学生の時から思うと、きれいで便利で、立派になった。名称も附属図書館から図書館情報センターとなった。さらに大きく変わったのは、P. コトラーの『図書館のマーケティング』の実践とは思わないが、多くの人に入館してもらうようにサービスが強化され、地域に開放していることである。図書館の素晴らしい環境形成はうれしく思うが、活字離れはさびしい気持ちである。

学生の皆さんの図書館活用と活字への挑戦を望んでいる。